

【実践報告】

人との関わりの中で自らの歩みを進め、追究し続ける子どもの育成
－ 4年 総合的な学習 『伝えよう林君に 伝えよう夏山川のこと』
『林君が喜ぶ夏山川にしていこう』の実践を通して－

高 沢 秀 昭

(額田町立夏山小学校)

1. はじめに

本学級の子どもたち12名（男子3名，女子9名）は夏山川で遊ぶことが大好きである。4月初から、「川でいかに遊びがしたい」（児童E）、「泳ぎたい」（児童K）などのつぶやきが聞こえてきた。また，児童Jは今年のはかせタイム（総合的な学習の時間）でやってみたいことを次のように書いた。

夏山川で遊ぶのはとても楽しい。去年の4年生は夏山川でたくさん活動していたし，はかせタイムも楽しそうだった。だからそれを参考にして，ぼくもはかせタイムで夏山川のごみ拾いをやっていきたい。
<4月15日 児童Jのはかせノートより>

児童Jは去年の4年生がやっていた活動に興味をもち，今度は自分たちがやってみたいという気持ちをもっていると感じた。そこで，この思いを満たせてやりたいと願い，子どもたちの興味が強く，また継続して働きかけていくことができる夏山川を教材として取り扱うことにした。

2. 研究の方法

(1) めざす子ども像

めざす子ども像を次のように設定した。

人との関わりの中で自らの歩みを進め，
追究し続ける子ども

児童Gは夏山で生まれたが，父親の仕事の関係で2歳から2年生まで埼玉で過ごし，3年生の4月に本校へ転校してきた。埼玉にいた頃から父親や祖父に夏山川のことを聞き，自分の家の近くを流れる川と夏山川を比べながら，「きれいな川で遊びたい」という思いをふくらませていた。また，「今度，おじいちゃんに昔夏山川にいた魚のことを聞いてみます」と，祖父に繰り返し聞き取りを

し，その結果を嬉しそうに報告してくれた。

夏山川のことを話題に児童Gは祖父に自ら関わりを求め，歩み出そうとしている。児童Gはこれからの追究の中で，困ったことや知りたいことが出てきた時に祖父に積極的に聞き取りをしていく。そして，「夏山川をよりよくしたい」という思いから，環境保護への取り組みを実際に展開されている方に繰り返し関わりを求めることで，児童Gは追究し続けていくことができると考えた。このようなねらいから，研究主題を『人との関わりの中で自らの歩みを進め，追究し続ける子どもの育成』とした。

(2) 研究の仮説

環境保護のために今できることを考え日々実践されている方と交流したり，家族に聞き取りをしたり，また，自分の思いを発信したりすることで，子どもたちは問題解決に向けて自らの歩みを進め，追究し続けることができるであろう。

(3) 手だての具体化

(手だて①) 環境保護活動に日々取り組んでいる方との交流の場の設定

子どもたちは1年生の頃から海洋生物学者の林正道さんと交流をし，三河湾の様子やスナメリの生態を教えてもらってきた。林さんの「できることから始めよう」という言葉に刺激され，子どもたちは残さず食べたり洗剤ではなく石鹼を使ったりするなど，自分たちが環境保護のためにできることを日々進めている。また，体調を崩している林さんを元気づけたいという思いを強くもっていた。そこで，林さんとの交流の場を設定することで，子どもたちは「林さんのために三河湾までき

れいにしたい」という思いをふくらませ、夏山川への思いを強くもち、繰り返し働きかけていくであろう。

また、林さん以外にも、環境保護活動を実践されている方や上級生との交流の場を設定することで、子どもたちは問題解決に向けて追究し続けるであろう。

(手だて②) 家族から昔の夏山川を学ぶ場の設定

子どもたちは夏山川と繰り返しふれ合う中で、「もっと深くてきれいな夏山川にしたい」と思うと共に、昔の様子が知りたくなるであろう。魚の種類、遊び方などを家族に聞き取る中で、昔のような夏山川に近づきたいという思いをふくらませ、その実現のために自分ができることは何かを考え、追究を進めていくであろう。夏山川への家族の思いにふれる場を設定することで、環境保護の考え方をさらに広げるきっかけになるであろう。

(手だて③) 自分の思いを発信する場の設定

子どもたちは家族や林さんの思いにふれる中で、「みんなで協力し合えば、きっと夏山川は昔のような姿に戻る」と気づき、その思いを発信しようとする。発信する場を設定することで、子どもたちは自分の思いや歩みの様子を整理し、「ここまでできたんだから、次はこうしたい」と次への意欲を高め、見通しをもって次の活動を進めていくであろう。

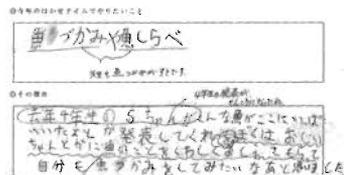
以上3つの手だての他にも、子どもの意識や活動の様子を把握しながら、常に単元構想の見直しや修正を図り、子どもの思いにそった息の長い学びが展開できるようにする。

3. 実践と考察（検証）

(1) 上級生、林さんとの交流の中で自分の歩みを見つめ直す児童G（手だて①②③）

①自分も魚つかみをしてみたい

今年のはかせタイムの最初の時間に、やってみたいことを書かせたところ、児童Gは右の資料の



〈4月15日 児童Gのはかせノートより〉

ように書いた。

去年の4年生の活動が参考になったこと、また祖父に教えてもらいながら進めることができると考えたことから、「魚つかみや魚しらべ」という活動を児童Gは選んだ。つかんだ魚をどうするか、何を調べるのかは児童G自身ははっきりしていなかった。ただの興味本位で進める活動はその場は楽しく感じるが、継続性がなく単発で終わってしまうことがあるので、本当に児童Gがやりたいことなのか、私は心配した。しかし、夏山川での活動を繰り返す中で、児童Gが本当にやっていきたいことを見つけ出すことができるであろうと考え、選んだ活動を実際に進めさせることにした。

児童Gは魚つかみに挑戦したが、何もつかむことができなかった。次第に魚つかみの興味が薄れていく雰囲気を感じた。その時、児童Jが「G君、ごみがいっぱい落ちているからごみ拾いをやろうか」と声をかけた。児童Gは児童Jとごみ拾いを始めた。川



岸から川の様子を眺めているだけでも、児童Gは川に浮いているごみの多さに気づいていた。しかし、実際に川の中に入ってみると浮いているごみだけでなく、川底に沈んでいるごみを見つけることができた。

児童Gは次のような感想を書いた。

ごみ拾いをやって少しはごみがへったと思うけど、でも、まだごみ拾いをやらないときれいにはならない。だから、みんなでごみを拾ってごみがない夏山川にしたいです。そして、夏山川をきれいにしてネコギギやヤツメウナギをふやしたいです。

〈4月16日 児童Gの川遊びの感想より〉

この日、児童Cが数が減っているためになかなか見ることができないヤツメウナギを手でつかんだ。児童Gは祖父から昔は夏山川にヤツメウナギ、ネコギギがたくさんいたこと、そして祖父の小さい頃は川にごみは落ちていなかったことを聞いていた。児童Gはごみが増えたことで魚が減少したのではないかと予想し、ごみ拾いをして「ネコギ

ギヤツメウナギをふやしたい」と考えるようになった。しかし、魚が減少している原因はごみの問題だけではなく、いろいろな要因が絡み合っている。そこで、児童Gの視野を広げるために、何とか林さんに出会わせたいと考えた。

②三河湾に落ちているごみは夏山から流れて来ているかもしれない(手だて①)

林さんが主催する会に参加するために、4月の春の遠足で渥美町に出かけ、海岸のごみ掃除の他に



〈林さんにプレゼントを手渡す〉

地引き網体験をした。直接林さんに会うことができ、「もう君たちに教えることはない。だから、夏山川と一緒に遊ぼう」と言葉をかけてもらった。

今日の活動の中で、ごみ拾いが一番心に残りました。ごみがうまっていたりして捨てるのが大変でした。ペットボトルやビニールごみがたくさん落ちていました。ここに遊びに来た人が捨てたごみもあると思うけど、海は川につながっているから、もしかしたら三河湾に落ちているごみは夏山から流れているかもしれない。だから、三河湾のためにも夏山川のごみを拾いたい。そして、きれいな海にして林さんを喜ばせたい。

〈4月26日 児童Gのはかせノートより〉

児童Gは三河湾と出合ったことで、夏山川のごみ拾いが三河湾のためにもなることに気づき、自分の活動の意味を感じていること、川から海へと視野が広がっていることが分かった。また、林さんに直接会えたことが「林さんを喜ばせたい」という思いにつながり、「林さんのために」という思いで粘り強く活動を進めていくと感じた。そこで、繰り返し林さんに会う場を設定したいと考えた。子どもたちは林さんに会える日を目標に活動を進め、まとめ、そして自分たちの思いを林さんに伝えていくなど、計画的に追究を進めていくことができるであろう。そこで、『伝えよう林君に伝えよう夏山川のこと』という単元を設定した。

③EM団子を作って夏山川を少しでもいいからきれいにしたい

注：EMとはEffective (有用な) Microorganisms (微生物群)の略で、その頭文字からEMと呼ばれている。またEMボカシ、畑の土、粉粘土を混ぜ合わせて団子状にしたものを、子どもたちはEM団子と呼んでいる。

川遊び、林さんとの出会いを経験した子どもたちは、その時の思いや願いをもとに右の表のように各自の活動を選んだ。また、すぐに活動に入る

活動を通して林君に伝えたいこと

児童名	活動テーマ
児童D, F	夏山川にいる魚を教えよう
児童I	夏山川のきれいさを伝えよう
児童C, L	ホタルのことを中心に夏山川にすむ生き物を教えよう
児童G, J, K	ネコギギヤツメウナギをふやそう
児童A, B, E, H	夏山川の遊びをビデオで紹介しよう

るのではなく、友達の活動の良さを自分の活動に取り入れたり、困っている点にアドバイスを与えたりして、一人一人が自信をもって歩みを進められるように支援する場として学級でのテーマ発表会を位置づけた。自分がその活動を選んだ理由、追究する方法を説明し、聞いている子はその友達が安心して歩みを進められるようなアドバイスをするという形で進めた。活動を選んだ理由から、夏山川をきれいにしたいという児童Gの思いが強く伝わってきた。また、三河湾でのごみ拾いをしたときに受けた印象が強かったからか、発表の時点ではごみを拾うことで川をきれいすることしか考えていなかった。しかし、児童Dから「ネコギギヤツメウナギをふやす活動はごみ拾いか考えていませんか?」と質問をされた時、去年の4年生の活動を思い出し、「EMキッチン液を流したりEM団子を川に置いたりすることもやってみたいです」と答えた。

児童Gのテーマ発表の内容

○活動を選んだ理由

- ①林君といっしょに川のごみ拾いがしたい
- ②いつもきれいな夏山川にするようにごみを拾っていることを伝えたい
- ③昔いたようにネコギギヤツメウナギを夏山川にとりもどしたい

児童Gはテーマ発表会の中で、互いに学ぶ喜びを味わうことができ、夏山川をきれいにするため

にEM団子を作り、実際に使っていきたいという思いをふくらませていることが、次の感想から伺えた。

ぼくは発表をするときにうまくしゃべれなくて、他のグループよりへただったと思いました。でも、ごみ拾いのことでみんながいろいろな意見を出してくれました。また、みんなのテーマを聞いて、すごくいいなと思いました。みんないろいろなテーマがあって、どれも林君に話したいなと思いました。土曜日に家のインターネットでEM団子の作り方を調べました。作り方が書いてあったので、自分でも作れる気がしてきました。EM団子を作って夏山川を少しでもいいからきれいにしたいと思いました。〈5月19日 テーマ発表会数日後の児童Gの感想〉

今回の発表の様子から、児童Gが自信をもって発表できるように表現力をつけさせたいと強く感じた。自分の活動を納得のいくまで追究することで児童Gに自信をつけさせると共に、自分の思いを整理し発信する場を繰り返し取り入れ、今後、発表にも力を入れて取り組んでいきたいと考えた。

④EM団子が作りたくなった(手だて①)

テーマ発表会を終え、グループ追究が始まった。児童Gはごみ拾いによってどれだけ夏山川がきれいにな



〈水生生物調査を行う児童G〉

ったかを確かめるために、去年の4年生の活動を参考に水生生物調査を行った。

川の底の石をどかしてみたら、小さな生き物が動いていました。教室に持って行って調べたら、きれいな水にすむウズムシ、サワガニ、ヘビトンボ、ヒラタカゲロウ、ナガレトビケラでした。きたない水にすむ生き物はミズカマキリだけでした。だから、夏山川はきれいなんだと思いました。水生生物調さって楽しいなあとと思いました。これからも水生生物調さをして、夏山川にはきれいな水にすむ生き物が多いか、きたない水にすむ生き物が多いか知りたいなと思いました。

〈5月29日 児童Gのはかせノートより〉

児童Gは正確な調査をやりたいと考え、資料を探した。自分で水生生物調査用の道具を作り、その後の調査に活用した。また、自分たちが夏山川に働きかけた成果をこれから水生生物調査で判断していきたいと考え始めたこともこの日のふり返

りから感じられた。夏山川をどの方法できれいにするかを児童Gが決めることができれば、判断する方法が決まっているだけに自信をもって追究を進めることができると考えた。そこで、児童Gが夏山川へ働きかける方法を見つけるきっかけ作りとして、去年夏山川で活動した5年生と交流する場(「教えて5年生」)を設定した。

児童Gはごみ拾いで夏山川をきれいにしたいと伝え、水生生物調査の方法を質問した。

最初、ごみを拾うことで川をきれいにしたいと考えていた児童Gは学級でのテーマ発表会をきっかけに、EM団子に注目し始めた。

ぼくは一番最初はごみ拾いでネコギギとかをふやそうと思っていました。でも5年生が「EM団子を作ったら」とか「EMキッチン液につけた竹炭を川に置いたら」とかいろいろな意見を出してくれました。夏山川をきれいにするためにそのことをやろうと思いました。そして、EM団子とかで砂がきれいになったとか、魚のえさにもなったとか、こうかも教えてくれたので、EM団子が作りたくなりました。

〈6月10日 「教えて5年生」後の児童Gの

しかし、EM団子にはどんな効果があるのかが分からず、作るまでには至らなかった。今回5年生からEM団子の効果を聞き、実際に作っていきこうとする気持ちの高まりを、「作りたくなった」という言葉から感じた。また、夏山川をきれいにする方法がごみ拾いの他にもたくさんあることを教えてもらったことで活動の視野を広げることができ、5年生と関わる場を設定した成果を感じた。行動力のある児童Gは夏山川をきれいにするために、今後いろいろな方法に挑戦し、粘り強く追究していくことが期待できる。夏山川を教材として異学年の子どもたちと交流学习が行えるのは総合的な学習がもつ魅力の一つである。

⑤自分たちから会いに行こう

子どもたちは林さんに夏山川の様子を伝えようと活動を続けてきた。しかし、林さんが体調不良のため本校に来ることができないという問題が生じた。そこで、これからどうしていくのかを子どもたちと話し合った。

子どもたちは林さんに夏山川のことを伝えたいと願い、活動を進め、会う日を楽しみにしていたからこそ、児童Gの「水の泡のような気がする」という発言が出たと考える。しかし、子どもたち

が自ら歩んできたことは決してむだではなく、力となっていることに気づかせたかったので、「本当に水の泡なのかな」(T2)と切り返しをした。

T1 林さんが体調を崩されているので、夏山川に来ることができないそうだ。林さんに伝えようと活動を進めてきたけど、それを聞いてどう思う？

児童D 林君に見せようと図鑑をせっかく作ったのに、見せられないのは悔しい。

児童G ぼくも水生生物調査のことが伝えられないので、今までやってきたことが水の泡のような気がする。

T2 みんながやってきたことが本当に水の泡なのかな？

児童L 夏山川のことが分かったし、自分一人でもいろいろなことができるようになったから、やってきてよかった。

児童H 今年が無理なら来年来てもらえないかな。きっと元気になって来年は来てもらえると思うよ。

児童E みんなは来てもらうことばかり考えているけど、林君が出席するイベントに自分たちが参加しよう。林君が来ることを待っているんじゃないで、自分たちから会いに行き、やってきたことを伝えようよ。

〈7月4日の授業記録の抜粋〉

児童Eが「自分たちから会いに行き、やってきたことを伝えようよ」と発言した。これは、4月の遠足で林さんに自分たちから会いに行った経験があったからこそその発言であり、遠足の意義を改めて感じる事ができた。

林さんに来てもらえず、自分の活動が水の泡になった気がしていた児童Gも児童Eの発言がきっかけとなり、前向きに歩み出そうとしていた。

ぼくは林君にこっちに来てもらうことしか考えていませんでした。でも、Eさんが「自分たちから会いに行こう」と言いました。待っていてもいつ林君に来てもらえるか分からないので、自分たちから会いに行った方がいいと思います。これで林君にぼくたちが今何をやっているか伝えられると思いました。

〈7月4日 話し合い後の
児童Gのはかせノートより〉

この話し合いで、子どもたちは会えないからあきらめるのではなく、自分たちから会いに行くことも大切であると気づいた。

⑥夏山川をもっときれいにしたい(手だて①③)

三河湾のスナメリを救おうと林さんと一緒に活動をされているスナメリくらぶの方から、「林さんが主催するスナメリ祭り(渥美町:7月)に来ないか」と声をかけていただいた。林さんに直接会える絶好の機会なので、私はぜひ子どもたちに

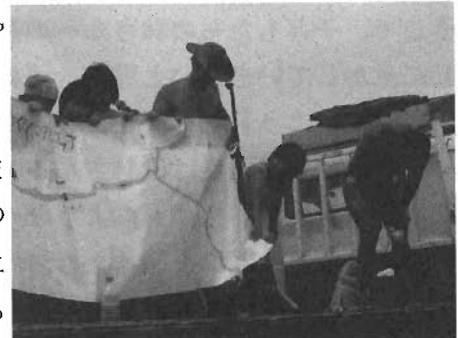
も参加させたいと願い、まず、子どもたちに相談した。もちろん、全員が賛成したが、夏季休業中のイベントであり、また送迎も必要になるため担任と子どもだけの判断では話を先に進めることができなかった。

そこで、1学期の保護者会でスナメリ祭りの説明と参加のお願いをした。すると、保護者会後にその件について保護者が集まり、どうするかを話し合っていた。その結果、マイクロバスを借り、4年生の子ども全員が家の人と一緒にスナメリ祭りに参加することができることになった。学級通信で子どもたちの学びの様子を紹介し続けてきたことで、保護者の理解が得られたと考える。

林さんに再び会える、自分たちが林さんのために進めてきたことを直接伝えられるという喜びを胸に、子どもたちは林さんに伝えるための原稿と資料の準備を進めた。児童Gは水生生物調査の方法、夏山川で見つけた生き物の種類と数などを模造紙にまとめた。

スナメリ祭りの前半はジェットボートなどを体験後半は特設ステージの上で林さんにこれまでの学びを直接伝えた。学校以外の場所で大勢の人を前にして発表することは、子どもたちにとって初めての体験であり、緊張しながら出番を待っていた。発表が始まると、子どもたちは要点をまとめて分かりやす

く、堂々と発表することができた。また、林さんの涙を目の当たりにし、「もっと喜ば



〈子どもの発表に涙を流す林さん〉

水生生物調査のことを説明したとき、林君は「どうして水生生物調査をやるの?」と言ったので、「夏山川をきれいにしてきれいな水にすむ水生生物をふやせば、ネコギギなどが集まってくるかもしれないからです。」と答えました。すると、「期待しているよ」と林君が言ってくれたので、夏山川をもっときれいにしたいな、と思いました。林君に今何をやっているか伝えられました。林君は「来年は無理してでも夏山へ行ってみんなで遊ぼう」と言ってくれたのでうれしかったです。

〈7月21日 スナメリ祭り後の
児童Gのはかせノートより〉

せたい」「元気づけたい」という思いを強めた。

緊張しながらの発表であったが、児童Gは林さんの質問に明確に答えていた。自分の活動の意義を理解しており、今後も自信をもって自分の歩みを進めていけると感じた。また、林さんに伝え、「期待してるよ」と声をかけてもらえたことが喜びとなり、「夏山川をもっときれいにしたい」という思いにつながっている。さらには来年に期待をふくらませる記述もあり、このスナメリ祭りで、『伝えよう林君に 伝えよう夏山川のこと』の単元の区切りをつけることができ、来年林さんが夏山に来た時のための準備をこれから始めていきたいという雰囲気を感じた。

⑦林君がびっくりするくらいきれいな夏山川にしたい（手だて②）

スナメリ祭りで伝えたとき、林君が喜んでくれてとてもうれしかったです。来年林君が来たときにびっくりするくらいきれいな夏山川にして、いっしょに水生生物調査の競争をしたいです。そのためにEM団子で夏山川をきれいにしたいです。

〈9月2日 児童Gのはかせノートより〉

2学期に入ってからスナメリ祭りの思い出が支えとなっていた。「びっくり」という言葉に、林さんをもっと喜ばせたいという児童Gの思いを感じた。また、児童Gの他にも、「林君を喜ばせたい」とはかせノートに書く子どもが多数いた。そこで、子どもたちの林さんへの思いを今後の活動に生かしていきたいと考え、『林君が喜ぶ夏山川にしていこう』という新たな小単元を構想した。

子どもたちの大半は「林さんが喜ぶ川＝きれいな川」と考えており、どのような川を「きれい」とするのか共通理解を図るために考えを聞いてみた。すると、児童Gは「おじいちゃんが子どもの頃のような昔の夏山川」と答えた。今の夏山川を「きれいだ」と言われる方もいる。しかし、長年夏山に住んでいる方は「川の様子が変わってしまった」と嘆かれることがある。今よりももっと良かった時期があったはずである。そこで、過去を知ることが現状を見つめ、未来の夏山川への思いを広げるきっかけになるだろうと考え、夏山川に対する深い思いをもつ方と出会い、昔の夏山川の様子を探る活動を取り入れた。

児童Gは祖父、父親から聞き取りをした。昔は

2m以上深いところがあり、夏山川で水泳の授業ができたことを知り、「深くてきれいな川にしたい」と発表した。そして、それぞれが聞き取ったことを交流させる話し合いの中で、子どもたちは夏山川の現状と昔の様子を比較し、「顔を安心して水につけることができ、水を飲めるのがきれいな川」と結論づけた。家族や地域の方々の協力が得られ、子どもたちの学びが支えられるのも総合的な学習の魅力の一つである。

（2）鈴木安雄さんと出会い、活動の視野を広げる児童G（手だて①③）

注：鈴木安雄さんは、額田町役場まちづくり課の課長である。

①竹炭はすごい力をもっている（手だて①）

9月に鈴木さんが、10月に行われる「乙川リバーヘッド大作戦」の説明に来校された。これは学区の「おおだの森」に竹炭をまく活動である。これまで三河湾とのつながりで夏山川へ働きかけてきた子どもたちに、竹炭をまくなどして山に働きかけることの意義を感じ取らせることで、水の循環を山、川、海の関連で捉えていくことができると考え、鈴木さんと出会わせることにした。

山の上の方は緑に見えるが木の根元は砂漠化している額田の山の現状、それがもたらす問題などを鈴木さんから教えていただいた。間伐をしたり竹炭をまいたりして山の手入れをすることが保水力を向上させることを知り、児童Gは「竹炭はすごい力をもっている」と感じた。すぐには竹炭を使った活動へ進まなかったが、鈴木さんとの出会いにより、児童Gはリバーヘッド大作戦の意味を理解できた。

②いろんな学校でEMの活動をしてほしい（手だて③）

児童Gと対話をし、EM団子にこだわる理由を聞くと、「EMキッチン液（米のとぎ汁EM発酵液）は流れて行くけど、EM団子はその場にとどまるから、その場の効果が大きいんです」と自分の体験をもとに答えた。また、「川は海につながるのだから、全ての川をきれいにしたら、きっと海もきれいになる」と話してくれた。私は児童Gの思いの広がりを感じ、「EM団子を作ることで満足

せず、いろいろな学校の人にもEM団子のことを広めるといいよ」と助言し、9月のソニー入選プロジェクト校発表会で参観者の先生方に説明することを勧めた。発表会当日、児童G〈EM団子の発表をする児童G〉



は、EM団子の作り方、その効果、林さんを喜ばすために全ての川をきれいになりたいという思いを発表し、効果を上げるために各学校でも作ってほしいと呼びかけた。

発表しているときに、聞いているお客さんは感心しているような顔で、うんうん、とうなずいてくれました。だから、ぼくの説明がうまく伝わったのかなと思いました。これをきっかけに、いろいろな学校でもEMの活動をしてほしいと思います。

また、Iさんが「生活はいい水はいつも流れているから、川をきれいにしてもきたなくなる」と言っていたので、EM団子で川をきれいにしても生活はいい水が流れてくるから意味がないと思いました。だから、生活はいい水を少しでもへらしていきたいと思いました。

〈9月26日 発表会後の児童Gのはかせノートより〉

テーマ発表会、「教えて5年生」では自分が書いた原稿を見ながら発表していた児童Gが、今回は参観者の反応を確かめながら発表を進めていることを上の感想から読み取ることができた。相手の反応を見ることで、自分の発表が伝わったかどうかを判断することができることに気づき始めているように感じた。また、児童Iの意見を参考に、EM団子を使うだけではなく、生活排水にも目を向けなければ川はきれいにならないことにも気づき、新たな課題が生まれた。生活すれば必ず生活排水が出る。中でも、合成洗剤が大量に含まれた生活排水がヘドロのもとになる。この時点で、児童Gは「シャンプーやリンスの量をへらしたり、石けんを使ったりしてほしい」という思いをもっていた。この思いを家庭や地域に何らかの形で発信させたいと考えた。

③山の様子が変わるか楽しみ

10月に「乙川リバーヘッド大作戦」に参加し、おおだの森に親子で竹炭をまいた。

竹炭をまいたという体験で終わらず、今後も繰り返し山の様子を見ていきたいと児童Gは考えて

いる。これまでは夏山川に直接働きかける活動を進めてきたが、リバーヘッド大作戦への参加をきっかけに、おおだの森に働きかけることで三河湾までもきれいにできることを体感した。

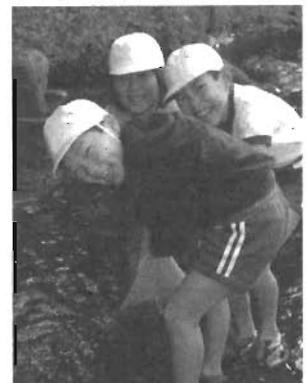
おおだの森に竹炭をまきました。竹炭のこうかです。山の木に下草が生えて夏山川の水がきれいになれば、ネコギギやヤツメウナギもふえるかもしれません。おおだの森は家の近くなので、これからも見に来たいです。山の様子がどのように変わるか楽しみです。

〈10月12日 リバーヘッド大作戦参加後の児童Gの日記より〉

④おおだの森を手入れして昔のような夏山川にして海まできれいにしたい

地域の方が焼いてくれた竹炭が校地内の炭焼き窯の中にあり、自由に使っていいことを伝えると、児童Gらはその使い道を相談し、「EMキッチン液につけた竹炭を川に置く」「細かく砕いた竹炭をおおだの森にまく」と決め、準備を進めた。

児童GはEM団子と同じように竹炭がEMの巣となり、その場にとどまることで、その場の効果があることを調べるために、EMキッチン液につけた竹炭（EM竹炭）をネットに入れ、夏山川に置いた。



〈EM竹炭を置く児童G〉

次に細かく砕いた竹炭を持ち帰り、休日に児童Jらと共におおだの森にまいた。

今日、おおだの森に竹炭をまきました。おおだの森にまきたい理由は、3年生のころおおだの森に初日の出を見に行ったときに、あちこちで木が倒れているのがあって、4年生になってもそれが気になっていました。そして、鈴木さんが竹炭をまくことで木が倒れにくくなると思ったからです。また、リバーヘッド大作戦で竹炭をまいたけど、うまくまけていないところもあったからです。山をきれいにするので川がきれいになります。海もきれいになります。だから、おおだの森を手入れして夏山川を昔みたいな川にして海をきれいになりたいです。

〈12月14日 おおだの森に竹炭をまいた日の児童Gの日記より〉

リバーヘッド大作戦は予め計画されていた行事であり、竹炭をまくことも決められていた。しかし、今回は自分たちでまくことを計画し、細かく砕くなどの準備を自分たちの手で進めた。この自

主的な取り組みから、竹炭、おおだの森への児童Gのこだわりの強さを感じた。そして、この根底には夏山川、三河湾への思いがある。また、児童Gの日記の最後の一文から、山、川、海の関連で水の循環を捉えるようになったことを読み取ることができ、児童Gの視野の広がりを感じた。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

児童Gは学習の歩みを次のようにふり返った。

スナメリ祭りの時、ぶ台の上で林君に水生生物調さのことを伝えました。そして、その場でのこうかが出るのはEM団子しかないと思っていたので、EM団子で川をきれいにしようと思っていました。でも、鈴木さんが竹炭を使うと山の木に下草が生えて山がきれいになり、川、海までもきれいになると教えてくれたのがきっかけで、川をきれいにするスタートは山をきれいにすることだと分かりました。10月12日のリバーヘッド大作せんでは、おおだの森に竹炭をいっぱいまきました。でも、4トンまかないとおおだの森はきれいにならないそうなので、自分たちでも竹炭をくわいて山にまくことにしました。それから、竹炭をEMキッチン液につけて川に置くとその場でEMのこうかが出ると知り、その活動もやりました。

3学期は水生生物調さをやって川がどれだけきれいになったか、調べてみたいです。

〈12月18日

児童Gのはかせノートより〉

春の遠足で林さんに会い、児童GはEM団子を作って川をきれいにしたいという思いをふくらませた。そして、スナメリ祭りで林さん本人から励ましの言葉を受けることで、思いを固め、実際にEM団子を作り、川に置いた。手だて①により林さんに繰り返し関わる場を設定したことで、児童Gはやりたいことを見つけ、自信をもって追究を進めていった。また、鈴木さんの話を聞き、おおだの森に竹炭をまくことで三河湾までもきれいになり、林さんを喜ばすことができると考え、竹炭を使った活動を進めた。山→川→海の大きな循環で環境浄化を考えることができるようになり、その方法もEM団子から多目的に使用できる竹炭へと変わった。鈴木さんと出会ったことで、児童Gの環境保護を考える視野が広がった。

手だて②による児童Gの祖父への繰り返しの聞き取りは、「昔の夏山川を取り戻したい」という思いを深め、それが児童Gの活動の後押しをした。

さらに、手だて③により、スナメリ祭り、ソニ

ー入選プロジェクト校発表会などの発表の場を設定したことで、「計画⇒実行⇒ふり返り⇒次の計画」というサイクルで自分の歩みを整理しながら追究を進めていくことの大切さに、子どもたちは気づくことができた。また、この作業を繰り返す中で、児童Gは自信をもって伝えようと、人の反応を見ながら発表することができるようになった。

(2) 課題

児童Gはこの学習の中で人と関わりながら粘り強く追究を進め、自信をつけてきた。この粘り強さや自信が他の教科、領域においてどのように生かされているかを検証していきたい。また、「昔のような夏山川にしたい」という思いがあったからこそ、子どもたちは鈴木さんの話の内容が理解でき、竹炭を活用した活動へと発展したと考える。その背景には、「林さんを喜ばせたい」という思いがあり、子どもたちの活動を支えている。そこで、3学期に林さんと交流する場を設定し、スナメリ祭りの時以上に個が成長した姿を林さんに見せたい。それが、子どもたちの今後の活動意欲を高め、林さんを元気づける源になると考える。

5. おわりに

鈴木さんとの出会いがきっかけで、児童Gはおおだの森を手入れするために自分ができることを続けていこうと決め、野鳥の餌台を設置する作業にも自主的に参加した。私が願う「地域をよくするために動き出せる子ども」に児童Gが一歩ずつ近づいている雰囲気を感じた。児童Gが地域への思いをふくらませ、安心して動き出せるのは、家族や地域の方々が一緒に歩んでくれるからである。夏山の良さをホームページなどで他地域に向けて発信することで、地域への恩返しをしていきたい。

本校では5年生が学校田での栽培活動の担当をしている。今回、この学習を経験したことで、子どもたちは、水田に取り入れる水だけでなく水田から夏山川へ流れ出る水の水質にも細心の配慮をし、12人で協力して米作りに取り組んでいくであろう。そして、自分たちの歩みを自信をもって発信していく。そんな逞しい姿が見られることを期待している。